アドリエンヌ・ムジュラの愛について

井上三朗

一

ジュリアン・グリーンはその著作のなかで、執拗なまでに不可能な愛を取り上げ、愛することの苦悩を描いてきた。グリーンの小説においては、つねに恋愛的状況が設定される。しかし晩年（第四期）[1]の三部作の長篇小説、『遥かな国々』（一九八七、改訂版一九九四）、『南部の星』（一九八九、改訂版一九九四）、『ディクシー』（一九九五、改訂版一九九八）をのぞけば、愛は結婚に至らず、そのよろこびも問題にされない。処女作『クリスティーヌ』（一九二四）から『悪所』（一九七七、改訂版一九八一）まで、愛はいつも不可能なかたちをとり、煩悶をもたらす源泉にしかならない。

たとえば、グリーンの作品のなかでは、愛の実現をはばむような外的な障碍が認められる。愛の対象が牧師であったり、人妻であったり、義理の兄弟であったり、甥であったり、実の娘であったり、同性の人であったりすることで、人物たちの愛は、道徳的な次元でその成就が禁じられたものが多く、元来、挫折を運命づけられている。また誤解のテーマも見いだされる。誤解とは、作中人物が愛していることを、相手が知らないか、そう思っていないことである。『レヴィアタン』（一九二九）のアンジェールは、彼女の愛するゲレの誤解から、むごたらしい暴行を受け、『モイラ』（一九五〇）の中の混血の娘モイラは、自分の愛するジョゼフの無知のために殺害される。この二つの小説は、愛の誤解がひき起こした悲劇とも解せる。『敵』（一九五四）、『人みな夜にあって』（一九六〇）、『他者』（一九七一）における愛は相互的なものであり、告白され、一

定程度の交流を見せる。けれども宗教的な信仰が愛の結合を妨げる内的な障碍となり、愛し合う人物たちは別離を強いられる。

とはいえ、グリーンにおける愛は大抵の場合、一方的なものであり、対象との交わりをもたない。不可能な愛とは告白されない愛のことであり、これがグリーン的愛の典型である。その極限のかたちを、初期（第一期）の小説『アドリエンヌ・ムジュラ』[2]（一九二七）に見いだすことができる。本稿では、この作品に描かれた愛を吟味することによって、グリーン的愛の典型的な形態を具体的に認知したいと思う。

その目的のために、『アドリエンヌ・ムジュラ』のヒロインの内心で愛が発生し、希望をもって生きられるまでの経過をまずたどる。次に、彼女の愛が苦しみの源としての、不可能な・告白されない愛となることを一瞥する。それから、女主人公の愛の不可能性の理由を考究する。そのため、『トリスタンとイズー』における愛を引き合いに出しながら、彼女の愛のかたちを浮き彫りにすることになるだろう。さいごに、ヒロインの不可能な愛の情熱を維持させているものが何であるかを示すことによって、グリーン的愛の検討の締めくくりとしたい。

二

『アドリエンヌ・ムジュラ』のヒロインが、愛をいだき、愛を生の証しとするに至る経緯を、まず説明することにしよう。女主人公アドリエンヌは、フランスの地方のまち、ラ・トゥール・レヴェックの〈あかしで荘〉という家に、六十歳になる父親のムジュラ氏と、三十五歳の姉ジェルメーヌといっしょに住む、十八歳の娘である。〈あかしで荘〉の住人たちは、隣人たちと交流をもたないばかりか、家族間でも心の次元での触れ合いをもとめない。このため、アドリエンヌは孤立した状況に身を置き、変哲もない習慣のなかで単調な日々を送っている。第一部第一章で、食堂にいるアドリエンヌは、「彼女は

退屈なままに、人が疲れたときするように、顔をうつむけていた」（二八七頁）と描写される。アドリエンヌは疲労に打ちひしがれるように、倦怠感にとらえられている。アントワーヌ・フォンガロは、グリーンの作中人物たちの生の構成要素のひとつとして、＜運命＞＜孤独＞＜時間＞とともに、＜倦怠＞を挙げている。[3] アドリエンヌの生もまた、倦怠によって形成されている。

この小説の冒頭は、「アドリエンヌは突っ立ち、背中で両手を組み合わせて、墓場を眺めていた」（二八五頁。強調はグリーン）という文ではじまる。「墓場」とは、＜あかしで荘＞の食堂の壁に掛けられた、一族の十二人の先祖の肖像画のことである。この「墓場」への言及から、ムジュラ家の人びとの現状が窺知できる。アドリエンヌの家庭が、習慣、変化のない日常性に支配されているために、＜墓場＞と化してしまっており、それゆえに、＜あかしで荘＞の住人たちがその＜墓場＞で死者同然の暮らしをしている、という現状である。実際、退屈な生活は見方によれば、緩慢な死を意味する。

こうした中で、アドリエンヌの内面に生気をふき込む事件が発生する。郊外の街道での、モルクール医師との出会いである。散歩中、彼女は、「突然、一台の馬車がまちの方から、自分の方に向かって走ってくるのを見かけ」る（三〇〇頁）。その馬車には、「数カ月前からラ・トゥール・レヴェックで開業してい」（三〇〇頁）る、モルクール医師が乗っている。アドリエンヌは医師に「鋭い視線」（三〇一頁）を注ぐ。医師のほうは、「物珍しそうな表情」（三〇一頁）を浮かべたまなざしを、娘に投げ返す。けれども、「それはほんの一秒間の出来事でしかな」く、「すでに馬車は通りすぎていた」（三〇一頁）。

この場面において、モルクール医師の出現が、「突然」（Tout à coup）という副詞句からわかるように、予期しないもの、アドリエンヌの意思を越えたものである点は、注目に値する。アドリエンヌの「鋭い視線」は、彼女が医師にたいして並々ならぬ関心をいだき、医師に心を奪われていることを示す。医師が好奇心のよぎった目を向けることによって、アドリエンヌの内心に、愛の情熱が芽生える。というのも、彼女はこの瞬間的な出会いを振り返って、「このひとときが重大であり、このひとときのことを、のちのち自分が大いに考えるであろう」（三〇一頁）ことを確信するからである。モルクール医師

との邂逅は運命的なものであり、アドリエンヌの人生のなかで転換点をしるすほどに、決定的な瞬間となる。

このちち、アドリエンヌは生の倦怠感をますますつのらせる。彼女は、「自分の子ども時代や青春時代のことを思うと、必ず一種の退屈を覚えないではいられない」い（二九八頁）。そして、「いつ自分は幸福だったのだろう？　子ども時代がそれによって成り立つと考えられている、あの幸福な時間は、どこにあったろう？」（二九八頁）と自問する。倦怠の感情は不幸意識を生起させる。アドリエンヌはモルクールへの愛のなかに、倦怠からの脱出口と自らの幸福の可能性をさぐるようになる。また彼女は、父親が「自分の安楽のためにしか生きていない」し、胸を患う姉が、「自分の病気のことしか考えていない」と気づき（二九八頁）、家庭内での自己の孤立を感じ取る。かくしてアドリエンヌは、孤独からの解放をもとめて、医師への愛を生きるようになる。

アドリエンヌは、もう一度モルクールと会いたいと思って、郊外の街道への散歩を毎日、繰り返す。はじめて医師を見かけた日と同じように、「ひな菊やしもつけ草の花束を胸にいっぱいかかえ」（三〇一頁）て、路上を歩く。「同じ状況が同じ結果を招くであろう」（三〇一―三〇二頁）ことを信じるからだ。このふるまいは、医師との再会への強い願望を覗かせている。モルクールが近所に住んでいることを聞き知ってからは、アドリエンヌは、医師の館を部屋の窓から見るようにもなる。

「彼女は窓から身を傾けた。すると館の屋根と一枚の鎧戸の片隅が見えた。（…）ここからは隅しか見えないこの小さな建物が、道の曲り角のところに、アラビアの物語にある宮殿のように、不意に姿を現わしたように思えてならなかった。彼女は飽くことなくしげしげと眺めた。ばら色の煉瓦の煙突の間にふるえている若木の軽やかな梢と、暗い色の装飾用の石の規則正しい線とをじっと見やった」（三〇二―三〇三頁）。

アドリエンヌがはじめて医師の館を眺めるこの件りで、館が「アラビアの物語にある宮殿」のように現前していることに注意を払う必要がある。「アラビアの物語」とは、おそらく『一千一夜物語』のことであろうが、その中の「宮殿」に擬せ

られることで、医師の住む館が、幸福の宿るところと直感されている点とともに、アドリエンヌを夢想にいざなうものとしてあることが察知できる。また、アドリエンヌが部屋の窓から館を注視するという事実も、重要である。〈窓〉は外部世界と、そこに存在するはずの幸福なるものに、アドリエンヌを招いている。とすれば、〈部屋〉あるいは〈家〉は、牢獄とみなしうる。[4] さらに言えば、牢獄のごとき彼女の内なる〈孤独〉を表象すると解せる。一方、医師の〈館〉は〈愛〉の象徴である。それゆえ、〈窓〉は孤独から愛への架け橋の役割を果たしている。

ところで、この一節のなかの、「ふるえている若木の軽やかな梢」という表現は、一考を要する。プレイアード版テクストの註釈者、ジャック・プチも指摘するように、館の屋根の煙突のあいだに見える「若木」の描写は、このあと六度もおこなわれる（三二九、三六六、三七二、三九三、四〇五、四二三頁）。この数字は、アドリエンヌがモルクールの住む館に、それだけひんぱんに視線を注ぐことを示している。少し例をあげることにしよう。第一部第十二章の書き出しで、父とコンサートに行った日の黄昏どき、アドリエンヌは自室の「窓に額を押しつけ」て、「モルクールの住んでいる館の白い壁」と、「スレートぶきの屋根の上の、雨にそぼ濡れた、じっと動かぬ若木の黒い梢」に目をやっている（三六五―三六六頁）。

第一部第十二章は、ジェルメーヌの家出を伝えている。ジェルメーヌは胸の病いが悪化し、寝室で食事をとるようになる。しかし習慣に固執する父親のムジュラ氏は、日常生活に変化がきたされることを頑として認めず、上の娘を無理やり食堂におりてこさせ、一緒に食事をする。父の横暴に耐えかねたジェルメーヌは家出を決意し、妹の協力を得て断行する。この章の末尾には、早朝、アドリエンヌが姉の馬車での出発を、自分の部屋の窓から見送る場面が置かれている。場面は、「白い館の上方では、黒い葉をつけた若木が、朝のそよ風の中でふるえていた」（三七二頁）という描写で終わっている。

このような「若木」の描写を踏まえて、ジャック・プチは、「梢のふるえる木」が作品第一部において「一種のライトモチーフ」を形成するとみなしたうえで、それが「アドリエンヌの愛の象徴のように」なっていると述べている。[5] プチは、〈若木〉を愛の象徴とうけとっている。しかしながら、この解釈には疑問符がつく。というのも、〈若木〉の描写は、アドリエ

ンヌが医師の「白い館」を眺めるというかたちをとって、いつもなされているからだ。〈若木〉は〈館〉の付随物でしかない。ライトモチーフをかたち作るのは、〈若木〉ではなく、〈館〉のほうである。アドリエンヌが〈若木〉の梢に目をとめているとしても、眺望の中心をなすのは、モルクールの〈館〉である。前述のように、この〈館〉こそ、愛を表徴するとみるべきである。そよ風にふるえる〈若木〉は、医師への愛に揺り動かされる、アドリエンヌのこころを表象すると考えるのが妥当であろう。

アドリエンヌはモルクールの館を真近から見つめるために、夜の散歩に出かけるようになる。医師との邂逅ののち、彼女が郊外の街道に出向くことは、すでに指摘した。この習慣に、夜の散歩の習慣が取ってかわる。アドリエンヌは誰にも見つからぬように、日が暮れてから外出し、医師の館のあたりをうろつく。「この白い小さな家と、灯りのともった窓」（三〇五頁）を面前にしつつ、モルクールのことを慕う。「あの人はあそこにいる」と思念して、彼女は「自分を幸せに感じ」る（三〇五頁）。アドリエンヌは、「二階の灯り」が「消えるまで、通りを行ったり来たり」する（三〇五頁）。彼女のこころを占めるのは、モルクールとともにありたいという願いである。アドリエンヌは、医師の存在をたしかめ、自分のそばで医師が生きているのを実感することに、人生の意義を発見する。夜の散歩の時間は、「彼女の生存理由」（三〇五頁）となる。アドリエンヌはモルクールへの愛のなかに、自らの生の唯一の証しを探索するようになる。

三

とはいえ、このような愛は、対象への直接的な接近を目指さない愛である。郊外の街道への遠出にせよ、部屋の窓から医師の館を凝視するという行為にせよ、夜の散歩にせよ、どの行いからも、アドリエンヌの愛が対象との〈へだて〉のなかで生きられていることが識別される。端的に言って、モルクールは、アドリエンヌが愛していることを知らない。夜の散歩を

することによって、彼女が医師の存在を肌で感じ、幸福を覚えることがあるとしても、医師との距離は狭まらない。これは厳然たる事実である。やがて幸福感は消えうせ、苦しみが生じる。第一部第四章の記述を引くことにしよう。

「今や彼女は、避難場に駆けつけるように館のほうに走ってやってきた。気でも狂ったのだろうか？　こうしたありふれた家を眺めて、何がうれしいのだろう？　せめてここに住んでいる人が、自分を救けにくることができるのだったら。でもあの人は自分を知らないのだ」（三〇九頁）。

ここでは、医師の館が「避難場」になぞらえられている。この比喩から、アドリエンヌの脱出願望が看取される。言うまでもなく、牢獄と化した家からの脱出である。家の牢獄性は、彼女の孤独意識とかかわっている。アドリエンヌは〈館〉（愛）に、孤独からの〈避難場〉をもとめている。彼女は、「せめてここに住んでいる人が、自分を救けにくることができるのだったら」と思索し、医師が自分の救助者になることを切望している。モルクールは、アドリエンヌを孤独の牢獄から救出・解放すべき存在として現前している。だが実際には、医師はそうした働きをしていないし、〈館〉も〈避難場〉たりえていない。「こうしたありふれた家を眺めて、何がうれしいのだろう？」との問いをアドリエンヌが発しているように、以前は「アラビアの物語」に出てくる「宮殿」のように見えた医師の館は、今では陳腐な家になり下がり、館に目を注ぐことのむなしさが痛感されている。また、「でもあの人は自分を知らないのだ」と黙考しているように、アドリエンヌは、相手に理解されないままに思いを寄せること、言いかえれば、〈へだて〉の中で愛することの不毛さにも感づいている。

このあと、アドリエンヌは、「突然、自分の知らないなにものかに支配され、呼ばれているように感じ」、「通りを走りながら横切って、館の壁に唇を押しあて」ている（三〇九頁）。「自分の知らないなにものか」とは、彼女の内部に棲まう情熱＝欲望の力を指し示す。情熱＝欲望が結実した彼女の所作は、モルクールとのあいだに横たわる〈へだて〉を乗り越えようとするくわだてである。アドリエンヌが接吻する「館の壁」は、医師のからだ、または顔の代替物にほかならない。けれどもこのことは、彼女が現実のモルクールではなく、観念もしくは想念のなかのモルクールにしか接近していないことを含意す

る。アドリエンヌにおいて、愛の対象としての他者は、現実には到達することができない存在である。この冷厳な事実から、彼女の愛の不可能性が浮かび上がってくる。

不可能な愛は、告白されない愛でもある。アドリエンヌはモルクールのみならず、父親のムジュラ氏にも、姉のジェルメーヌにも、内心の思いを打ち明けない。彼女は秘密と沈黙のなかで自らの愛を生きる。娘の外出を不審に、また不快に思うムジュラ氏は、娘を詰問し、愛する男がいることを聞き出す。だがアドリエンヌはモルクールの名前を告げない。怒りの発作に襲われた父親は、娘を虐待し、気絶させ、挙句の果てに、外出を禁じてしまう。アドリエンヌは夜に散歩をするかわりに、自室で一人になったとき、モルクールの名を呼ぶようになる。

「父と姉が眠ってしまうと、自分ひとりの淋しい部屋のなかで、誰にも聞こえないように両手で口をおさえる配慮をしつつ、モルクールの名前をはっきりと口にすることが、習慣となってしまった。ジェルメーヌとムジュラ氏がどんなことをしても、彼女の口から洩らさせることのできないこの名前を、彼女は十度も二十度も、自分を苦しめる残酷なよろこびを覚えながら繰り返すのだった。しかしそれを口にしないと、息が詰まりそうな気がした」（三二九―三三〇頁）。

アドリエンヌが夜、孤独のなかで、モルクールの名を繰り返し呼ぶのは、「それを口にしないと、息が詰まりそうな気がした」からである。彼女は愛の秘密の重みに打ちひしがれて、窒息するような気分でいる。愛する人の名を声に出すことは、アドリエンヌにとって、その重みから、あるいは愛の秘密じたいから解き放たれることなのであろう。だからこそ、彼女は「よろこび」を味わうのだ。だがその「よろこび」は「自分を苦しめる残酷な」ものである。なぜ苦しみをともなうのか。アドリエンヌの発する声が、モルクールをはじめとして、誰の耳にもとどかないからである。声は聞かれるために、言葉は伝達されるためにある。アドリエンヌにおいて、モルクールの名を呼ぶことは、一種の告白に匹敵する。けれども聞き手のいない告白の営みは、独房の壁に向かって呼ばわる行為に等しい。壁に向かって発せられた言葉は、逆に秘密をもつことでの苦しみを反響させるこだまとして返ってくる。内心の思いは誰からも共有されることのない、ますます重い秘密となる。

アドリエンヌの挙動は、告白の不可能性を際立たせている。

アドリエンヌにおける告白の不可能性は、第二部以降、彼女が発送されない手紙および署名されない手紙を書くという事実からも見てとれる。これらの手紙が作成されるまでの物語の展開を把握しておきたい。第一部第十二章で、ジェルメーヌが妹の助けを借りて家出することは、先述したとおりである。このあと、ムジュラ氏は、アドリエンヌが姉に手を貸したことを見抜き、また、モルクールに恋をしていることをも明察し、激怒の中で娘を責めさいなむ。さらに医師のところに行って、娘の愛の望みを打ち砕こうとさえする。愛する自由を奪われそうになったアドリエンヌは、父親を階段から突き落とし、死に至らせる。ここまでが、第一部である。第二部に入ると、父親の死後のアドリエンヌの生活が叙述される。父親の専横から脱した彼女は、自由を獲得する。だが同時に、孤独感を深めていく。ひとりで生きることの辛さに耐えかね、彼女は汽車に乗って旅に出る。そして旅先で、モルクールに宛てて手紙をしたためるのである。

アドリエンヌはまず、モンフォールの宿屋の食堂で、メニューの紙の裏に、「わたしはあなたのせいで不幸になりました。あなたはわたしのことをけっしてあわれんでくださらないのでしょうか？」（四三〇頁）という文章を鉛筆で綴っている。この文章のなかで、「あなた」と呼びかけられている人物は、もちろんモルクール医師である。この人称代名詞の使用から、この文章が手紙文であることがわかる。アドリエンヌは告白の衝動にかられて、愛の苦しみを主題とする手紙を書いたのである。彼女はしばし解放感を味わう。しかしながら、この手紙はメニューの紙に書かれたものなので、当然発送されない。そのことによって、秘密と沈黙の重みはかえって逆にいやます。投函しない手紙の執筆は結局、誰にも聞こえないところで愛する人の名前を呼ぶという先の行いの延長上にあり、告白の不可能性を鮮明にしている。

次に、アドリエンヌは匿名の手紙を作成する。ドルー行きの列車を、駅のそばの簡易食堂で待つあいだ、彼女は絵葉書を買い、「わたしはあなたを愛しています。これが、わたしの書けるすべてのことです。でもわたしの心は、あなたのことでいっぱいです。泣きながら、あなたのことを思いつづけています」（四三四頁）といったように、全面的に自分の思いを披

瀝した、モルクールへの便りをしたため、封筒に入れて投函する。けれどもこの絵葉書は署名されない。アドリエンヌは医師に愛を告白することによって、「自分を窒息させている重荷から解放されるのだ」（四三三頁）と速断している。けれども手紙に自分の名を書かないことは、コミュニケーションの達成という、手紙本来の目的を放棄することにつながる。「これが誰からきたか、けっして彼にはわかるまい」（四三三頁）と彼女が推測するように、手紙の受け取り人であるモルクールは、誰かが自分を愛していることは知り得ても、その誰かを特定することは困難であるからだ。たとえ愛の告白をしても、手紙に署名しないかぎり、秘密・沈黙の重みから解き放たれはしない。匿名の手紙の執筆は、自慰行為に似ている。一時的に愛の苦悶がまぎれるだけなのだ。署名されない手紙は先程の発送されない手紙と同じく、告白の不可能性を露呈させている。

アドリエンヌはもう一度、手紙を書いている。旅からもどった彼女は、第三部第三章で、医師の姉マリー・モルクールの訪問をうける。マリーは、アドリエンヌが旅先から出した絵葉書を見せながら、「この絵葉書は名宛人には届かなかったのですよ」（四六九頁）と通告する。アドリエンヌの恋心を感知し、しかも、囲われの女であるルグラ夫人と親しくしている彼女に、悪い感情をもつマリーは、便りを隠匿したのである。実情に通じたアドリエンヌは、会って話をしたいという文面の手紙をしたため、それを直接医師に渡すために、白壁の館の付近に立つ。だが彼女は、医師が家から出てくるのを待つうちに、「とてもあの方に話なんかできないわ。できないわ」（四七二頁）と悟り、手紙を届けることを断念する。こうして三度目の手紙も、最初の手紙と同様、発送されない手紙となる。とはいえ、ここでは、「とてもあの方に話なんかできないわ」という思いにも留意すべきである。アドリエンヌは医師と交わりをもつことの意思、会って愛の苦しみを打ち明けたいという願いを捨て去ってしまう。この思いは、アドリエンヌにおいて告白が不可能なものとしてあることを如実に示している。

このように、アドリエンヌの愛は、不可能な・告白されない愛である。この愛を生きる中で、アドリエンヌは苦悩を深め、ついに狂気への道を歩む。その過程を示すことにしたい。医師に手紙を手渡すことをあきらめたアドリエンヌは、ルグラ夫

人の住むルイーズ荘に行き、呼び鈴を鳴らす。しかし彼女は気を失い、ルグラ夫人に介抱される。夫人から、アドリエンヌの容態が悪いとの連絡をうけたモルクール医師が、第三部第六章、彼女のもとにやってくる。この折、アドリエンヌはようやく医師に愛を告白する。医師は、「あなたは、誰か別の人を愛することもできたのです」（四九五頁）とさとす。だが医師に愛を拒絶されたからといって、アドリエンヌは自分の気持ちをどうすることもできない。彼女は、「わたしはあなたを選んだのではありません」（四九六頁）と反駁する。アドリエンヌは、自分の愛が報われないこと、苦しみが不毛であることを承知しつつも、愛することをやめることができない。宿命的な愛の苦悩から逃れることができない。「あなたを愛するのが間違ったことだといたしましょう。でもどうすることもできないのです」（四九六頁）という言葉は、彼女の愛の悲劇性をひき立たせている。アドリエンヌはモルクールに、「わたしを愛してくださらなければなりません。（…）さもなければ、わたし、気ちがいになってしまうでしょう。そう、気ちがいに」（四九六頁）と訴える。けれども医師は彼女の思いに応えることのないまま、帰っていく。

このあと、アドリエンヌの予言は的中する。ルグラ夫人や炊事女のデジレは、アドリエンヌが父親を殺したことを看破していて、そのことを匂わせながら、彼女から多額の金をまき上げ、視界から去る。この二人の人物の脅迫が、孤独の淵にいるアドリエンヌを発狂させる直接のきっかけとなる。とはいえ、彼女の苦悩と絶望の根底に、モルクールへの不可能な愛が横たわっていることは、疑いを容れない。作品は、発狂し、記憶を喪失したアドリエンヌが夜、祭りのために花火と音楽でざわめくラ・トゥール・レヴェックのまちを抜け出し、郊外の道を駆けていくところで終わっている。

四

アドリエンヌの不可能な愛の進展を通観した。今度は、アドリエンヌの愛の不可能性の素因に論及することにしたい。彼

女の愛はすでに見たように、告白されない。アドリエンヌの場合、告白の不可能性が愛の不可能性と分かちがたく絡んでいるので、彼女がなぜ愛を告白しないのかを考察することが、適切であると思われる。この点にかんして、アントワーヌ・フォンガロは、グリーンの作中人物たちの孤独を、彼らの性格を特徴づける、「一種、病的な内気さ」[6]と結びつけて説明している。ジャン＝クロード・ジョワは、グリーンの主人公たちがかかっている、「取り返しのつかないほど自分の中に閉じこもっていることに存する病い」[7]を指摘したうえで、この「病い」を彼らの孤独と関連づけている。ジョワによれば、主人公たちの病いを生成させる自閉的性格、ないし内向性が、彼らを孤独の深淵におとしいれている。

アントワーヌ・フォンガロ、ジャン＝クロード・ジョワの所見は間違っていない。たしかに、アドリエンヌもまた、内気な、あるいは自閉的・内向的な性格の持ち主である。この性格が彼女の孤立を招来しているし、モルクールへの接近を妨げていると推断できないこともない。けれども、アドリエンヌの愛の不可能性を、ただ彼女の性格のみに還元することは早計であるように思われる。なぜなら、アドリエンヌは第三部第六章において、それが遅すぎた告白であるとしても、来訪した医師に愛の告白をしているし、それ以前には、旅先から、署名しないとはいえ、全面的に自分の思いをぶちまけた手紙を書き送っているからである。匿名の手紙が告白の不可能性を露わにすることはほんとうである。だがこの行為のうちに、相手に自分の気持ちを打ち明けようとする、彼女なりの姿勢を認めるべきではないだろうか。一般的に考えて、一人の若い娘が見ず知らずの男性に、完全な愛の告白を敢行することは至難の業である。アドリエンヌのように、誰かが愛していることを知らせるために、匿名の手紙を発送するのが精一杯のところである。それゆえ、愛＝告白の不可能性の要因を、ただ単に性格の問題に帰着させるのは、皮相な見方だといえよう。

アドリエンヌが愛を告白しないのは、彼女の性格よりも、その愛し方に起因するように思われる。アドリエンヌは他者（相手）の現実にそくして愛するのではなく、夢想のなかで愛をはぐくんでおり、このことが彼女の愛の不可能性と大いに関係している。この点において、アドリエンヌの愛は、西欧の恋愛の原型をなすといわれる、『トリスタンとイズー』の物

語の中の二人の愛の延長上に位置づけられる。ドゥニ・ド・ルージュモンは名著『愛と西欧』（一九三九）において、トリスタンとイズーの愛を分析し、「二人が愛しているのは愛であり、愛するという事実そのものである」[8]と論断している。この見解はアドリエンヌにもあてはまるだろう。白壁の館を眺めて夢想にふけるとき、アドリエンヌは自らの愛を愛していて、愛しているという事実のなかに、よろこびを、自己の満足を探し求めているように思われる。ルージュモンは、こう続けている。

「トリスタンは金髪のイズーを愛するよりも、愛している自分を感じることを愛する。またイズーの方は、トリスタンをそばにひきとめておく努力を何もしない。彼女には、情熱的な夢だけで充分なのである。二人は燃えるために、互いに他者を必要とするが、必要なのは、あるがままの他者ではなく、他者の現前でもない。否、むしろ、他者の不在なのである！

こうして恋人たちの別離は、彼らの情熱じたいに由来する。情熱の充足よりも、情熱の生きた対象よりも、自らの情熱にいだく愛に由来しているのである」[9]（強調はルージュモン）。

ここでは、二人の恋人たちが自らの情熱への愛のために、「他者の現前」ではなく、「他者の不在」を不可欠とすることが指摘されている。実際、愛する相手が自己のそばにいるよりも、相手が自己から離れているほうが、情熱はその分はげしく燃え上がることはたしかである。だからこそ、二人は他者とのへだてのなかで愛することを選ぶのである。夢想のなかで愛を生きるアドリエンヌにとってもまた、必要なのは「他者の現前」ではなく、「他者の不在」であろう。夢想は不在によってしかはばたかないからだ。アドリエンヌはトリスタンとイズーとはちがって、愛されていない。しかし、他者とのへだてのなかで愛するという点では、この二人の人物と共通する。

またこの引用文では、トリスタンとイズーが自らの情熱を愛するあまり、「あるがままの他者」もしくは「情熱の生きた対象」を愛していないという点もまた、議論されている。同じことは、アドリエンヌについてもいえよう。アドリエンヌに

おいても、自己の愛の夢想が肝要なのであって、「あるがままの他者」、すなわち他者の現実は、顧慮の埒外に置かれる。彼女もまた、他者の現実にそくして愛するのではなく、「情熱の生きた対象」とは無縁のところで、「情熱的な夢」を愛育するのである。ルージュモンはこのあと、トリスタンとイズーの愛し方について、「おのおのの愛は、他者からではなく、自己から発して他者におよぶ愛にすぎない」[10]と評している。この評言は、アドリエンヌの愛し方を論じる際にも有効である。

トリスタンとイズーは、自らの情熱への愛のために別離を選ぶ。アドリエンヌの場合、「情熱的な夢」を追求する過程で、現実のモルクールからますます遠ざかる。医師との出会い以後、アドリエンヌは医師への接近をくわだてないし、医師にまつわる情報を積極的に得ようとすらしない。医師が四十五歳の年齢であるとか、五年前に妻を亡くしたとか、重い病気を患っているとか、同性愛者であるとかいったことを、彼女は何ひとつ知らない。白壁の館の風景に触発されて夢想するアドリエンヌにおいて、現実は遠い。この点に関連して、ジェルメーヌの部屋から白壁の館がよく見えるという理由のために、彼女が姉の部屋を所有したいという欲望にとりつかれるという事実は、看過することができない。第一部第三章、アドリエンヌがジェルメーヌの部屋に忍び込んで、医師の館に目を凝らすところは、次のように叙述される。

「彼女は音をたてないように姉の部屋に上がって行って、中に入り、開いたままの窓のほうに向かった。(…) 彼女は白い館をしげしげと眺めた。屋根のてっぺんから地下室の小さな換気窓まで、なんとよく見えることだろう。二つの窓が開かれていた。紅い絨毯と、たぶん事務机であろう、家具の一部分が見えたような気がした。彼女は胸をどきどきさせながら、うしろをふり向いた。そして窓の縁に腰かけた。彼女は、羨望と不意の悲しみに満ちたまなざしで、今自分がいる、しかし自分のものではないこの部屋をゆっくりと見渡した。

この日以来、彼女はもはやジェルメーヌの部屋のことしか思わなくなった。一日中それを考えていたと言うだけでは十分でない。なぜなら、孤独の烙印を押されたある魂について語るには、普通の言葉は役立たないからだ。そうした魂は、空虚な生活から一挙に、自分をめちゃめちゃにするような、一種の内部的熱狂に飛び移っていく。かくして姉の部

屋を自分のものにしたいという欲望が、いきなり彼女の心をとらえてしまった。そして倦怠のなかで成長し、なにかの機会に突然逆上する、こうした心にありがちの愚かしさから、彼女はこの欲望にすっかりとりつかれてしまい、挙句の果てに、時として、なぜ自分がこの部屋がほしいのかを忘れてしまったり、一日中モルクールのことを考えずに過ごすことさえあった」(三〇三頁)。

後半の段落のはじめに、「この日以来、彼女はもはやジェルメーヌの部屋のことしか思わなくなった」と、そしてさいごに、「彼女はこの欲望にすっかりとりつかれてしまい、挙句の果てに、時として、なぜ自分がこの部屋がほしいのかを忘れてしまったり、一日中モルクールのことを考えずに過ごすことさえあった」と書かれているように、アドリエンヌはジェルメーヌの部屋を所有することの欲望に翻弄されて、モルクールのことを想わないでいたり、さらには、なぜそれを所有したいのかさえ忘れてしまっている。もともと、白壁の館を眺めて夢想のひとときを過ごすという行いじたいが、現実のモルクールから離れることを意味する。館の見晴らしがよいという理由から、姉の部屋への所有欲にとりつかれることによって、彼女はいよいよ医師から乖離してしまうのである。その本来の理由すら失念しているという状態は、所有への欲望が、完全に医師への情熱に取ってかわっているありさまを示す。ジャック・プチはこの所有欲を、「愛の欲望の置きかえ」ないし「転移」とみなしている。[1] プチの解釈は正しい。たしかに、対象に直接的に発現されない愛の情熱が、アドリエンヌの内部で抑圧された結果、屈折したはけ口をもとめ、所有欲と結びつき、渾然一体となるのであろう。とはいえ、このこととともに、アドリエンヌが夢想の愛を生きるさなかに、他者の現実をすっかり忘却し、他者から隔絶してしまうという無視しがたい事実を、この件りから同時に見てとるべきである。

このようにアドリエンヌは、モルクールをあるがままに愛するのではなく、彼の現実から遠ざかり、へだてを置くことによって愛する。対象とのへだての中で愛するとき、対象は言うまでもなく理想化され、偶像視される。このことは、第一部第九章の記述からたしかめることができる。

「一方が病人で、他方が老人である、この二人の人間の間にあって、彼女は自分の力と若さとをきわめて明瞭に意識した。だが、そこから引きだせるよろこびは、まったく束の間の感情にすぎなかった。実際、十八歳でしかないということが、なんの役に立つのであろう？　自分は幸福なのだろうか？　彼女は家を逃げ出して、自分が希望のすべてを託している、あのモルクールの足もとにひれ伏し、妻にしてくれと哀願してみようかしら、と夢想した。なるほど、あかしで荘から白い館までは、数歩しかない。しかしこの数歩が、この二つの世界を引き離しているのだ。彼女は自分の境遇を対照法によってしか考えなかった。一方の、自分の家には、悲しみがあり、他方、モルクールの家にあるのは幸福なのだ。ここでは、生命が衰え、死が家のまわりをうろついている。が、あそこでは、心配のない、平穏な生があり、その生は、日々繰り返される、変わらないよろこびで満たされている。彼女は心の中で、あのモルクール医師の理想像を思い描いていた。ほんのちらっと見ただけだったが、医師は彼女の脳裡で、象徴的な人物の相貌を取っていた」（三四七―三四八頁）。

アドリエンヌは、現在の自分の不幸に思いをめぐらせたあと、自分が身を置く世界と、医師の住む世界とを、〈対照法〉によって把握している。「一方の、自分の家には、悲しみがあり、他方、モルクールの家にあるのは幸福なのだ」と思索されているように、二つの世界は〈悲しみ〉と〈幸福〉とによって対立する。また、次の、「ここでは、（…）死が家のまわりをうろついている」との確認から、この二つの世界の対峙は、〈死〉と〈生〉の対照でもあることが判明する。約言すれば、あかしで荘は〈悲しみ〉と〈死〉の牛耳る世界であり、白壁の館は、〈幸福〉と、「よろこび」に満ちた〈生〉が支配する世界であると認識されている。こうした認識のなかでは、モルクール医師は、当然のことながら理想化される。「彼女は心の中で、あのモルクール医師の理想像を思い描いていた」と叙述されているように、医師はアドリエンヌの理想の存在となる。さいごに、医師は、「彼女の脳裡で、象徴的な人物の相貌を取っていた」と語られる。彼女の思いのなかで、モルクールは〈幸福〉と〈よろこ

び〉にあふれた〈生〉を表象する人物となり、〈悲しみ〉から〈幸福〉へ、〈死〉から〈生〉へと橋渡しをしてくれる存在と化す。医師への思慕は、幸福とよろこびを約束・保証する〈彼方〉または〈彼岸〉への憧憬と等価なものであると思われる。このことは、アドリエンヌの想念における、「ここでは」(Ici) と「あそこでは」(Ia) という副詞のコントラストからも了解される。〈ここ〉が此岸を、〈あそこ〉が彼岸を指し示すことはことわるまでもない。モルクールは〈彼方〉ないし〈彼岸〉の存在であるがゆえに、アドリエンヌにとって、崇拝すべき偶像となる。

ところで、アンドレ・ブランシェは論文「実存にとりつかれたジュリアン・グリーン」において、アドリエンヌの愛を、こう評価している。

「アドリエンヌの、モルクール医師にたいする愛は、理解されない女が無限に向かって心をふくらませる、ある《ほかのところ》への脱出のこころみであった。かろうじて彼をほんのちらっと見ただけなので、彼女が愛するのは、このひよわな医師ではなく、想像上の存在、とても巧みな言い方がなされているように、《夢の人》なのだ。大いなる愛の対象となる人は、愛する者がその人にいだく狂おしいイメージのなかに自分を認めることはない。アドリエンヌは彼女自身ではなく、モルクールについて思い違いをしたのだ。彼女が見たモルクールは、彼女の欲望が創り出した姿だ。が、この欲望は全面的な解放への欲求に源を発している。恋愛とは、錯誤であると同時に真実、もっともこっけいな錯誤であり、かつまたもっとも深い真実である[12]」。

アンドレ・ブランシェは、アドリエンヌの愛を、「無限」への渇望によって支えられた、「ある《ほかのところ》への脱出のこころみ」と規定している。「ほかのところ」(ailleurs) は〈彼方〉〈彼岸〉と言いかえることもできる。彼女の愛が〈彼方〉あるいは〈彼岸〉へのあこがれによって成り立っていることは、この規定から再確認することができる。ブランシェはこのあと、アドリエンヌが愛するのは、実在する「ひよわな医師」ではもはやなく、「想像上の存在」であり、「夢の人」にすぎないと判じている。この判断は正鵠を得ている。先程、アドリエンヌの思いのなかで医師が理想化・偶像化されること

を論じた。先程の議論はこの判断と抵触しない。結局のところ、アドリエンヌの愛するモルクールとは、彼女の夢想、〈彼方〉への脱出願望、あるいは〈ここ〉からの解放への願いが結晶させた「想像上の存在」、つまり「夢の人」にほかならない。モルクールとは、ブランシェの認定するように、「彼女の欲望が創り出した姿」であり、幻にすぎない。だがこのことを笑うことはできない。多くの場合、愛はこのようなかたちをとるのではないだろうか。ブランシェは、「恋愛とは、(…)もっともこっけいな錯誤であ」ると断言している。アドリエンヌは現実のモルクールを正確に理解せず、愛の想念のなかで医師の虚像を創り上げたという点で、要するに他者の現実を見なかったという点で、「錯誤」を犯している。しかしこれを「こっけいな」(comique)と形容することができるであろうか。現実生活からの逃亡への願い、彼方への憧憬と表裏をなす、モルクールへの愛は、読者が共感・共有しうるものである。彼女の「錯誤」はcomiqueなものではなく、tragiqueなものとうけとるべきであろう。それゆえ、恋愛とは、〈もっとも悲劇的な錯誤〉であると結論すべきなのである。

五

以上、アドリエンヌ・ムジュラの愛を分析してきた。はじめに、モルクールとの出会いから、アドリエンヌが愛を自己の存在理由とするまでの経緯をたどり、次に、彼女の愛が不可能な・告白されないかたちをとっていることを瞥見し、それから、彼女の愛が不可能に終わる事由について論考した。結局、アドリエンヌの愛を不可能にする最大の原因は、彼女が夢想のなかで愛するがゆえに、現実の他者から遠ざかり、愛の対象が理想の存在、偶像となる結果、「想像上の存在」に思いを寄せているにすぎないという点に存すると論定しうる。

したがって、アドリエンヌの愛は、いかに真剣で熱烈であるとしても、現実の中ではむなしく、不毛である。束の間の希望をもたらすとはいえ、所詮は苦しみしか産み出さない。ではいったい、彼女において、何が不可能な愛の情熱をささえて

いるのであろうか。さいごに、この点を明らかにしておきたい。第一部第九章で、次のような文章を読むことができる。

「素朴な魂の持ち主にありがちな一種の神秘主義によって、彼女は、現在の自分の生活の境遇を苦しいと思えば思うほど、自分がいっそう彼〔モルクール〕のそば近くにいるような気がした。そして時として、自分が耐え忍ばなければならない数々の屈辱の辛さに、奇妙な心地よさが混じりあっているのを感じた。〈もしもあの人を愛していなければ、こんなに苦しみはしないだろう〉と、彼女は自分に言いきかせた。すると、この考えは少し彼女を元気づけた。あたかも、ある神秘的な分配によって、医師が自分の懊悩から利益を得るかのように」(三四八頁)。

最初に、「彼女は、現在の自分の生活の境遇を苦しいと思えば思うほど、自分がいっそう彼のそば近くにいるような気がした」という文に着目したい。この文から、アドリエンヌにおいて、苦しむことが、愛する人のそばに身を置くことにつながると信じられていることがうかがえる。「もしもあの人を愛していなければ、こんなに苦しみはしないだろう」という思いと照らしあわせると、愛しているせいで呻吟することこそが、自己を愛する相手に接近させる道であるとの信念が読みとれる。なぜならその相手は、「ある神秘的な分配によって、(…)自分の懊悩から利益を得る」からである。自己の愛の苦悶が愛する他者を利し、その他者のために役立つという発想は宗教的である。はじめに、「素朴な魂の持ち主にありがちな一種の神秘主義によって」と言われているように、神秘主義的な発想でもある。アドリエンヌの考え方は苦悩に価値を置き、苦しむことをとおして、魂の救済を希求する思想である。

これは作者グリーンの一時期の宗教思想でもある。グリーンは一九二四年に発表した信仰告白の書、『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』において、「天につかえること、それは苦しむことだ[13]」と明言している。グリーンは、苦しむことこそが、神につかえ、役立つことであり、神の愛をうけるのにふさわしく、救われることにつうじるのだと省察している。つまり、苦しむ人間こそ、神に近いという信仰を有している。アドリエンヌの発想のなかに、作者の宗教観の反映を見てとることができる。もっとも、彼女が恋い慕うモルクール医師は、神ではない。だが、医師は崇拝すべき偶像であ

り、つまるところ、アドリエンヌは医師を神のように愛しているのであろう。生身の人間を神のように愛することもまた、悲劇的な錯誤を構成する。しかし苦悩による救いを信じ、苦しむことで他者に到達できるという宗教的な信念が、モルクールへの不可能な愛の情熱をささえている。この点において、アドリエンヌの愛は、グリーン的愛のかたちの極北をかいま見せている。

註

(1) グリーンの創作作品群の分類については、拙著『ジュリアン・グリーン研究序説』人文書院、二〇〇二、三四―三五頁を参照。

(2) テクストはプレイアード版のものを用いる（Julien Green: *Adrienne Mesurat, Œuvres complètes*, t. I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972）。この作品からの引用文の頁数は本文で示す。

(3) Antoine Fongaro: *L'Existence dans les romans de Julien Green*, Angelo Signorelli, Roma, 1954, pp.21―100.

(4) 実際、アドリエンヌは〈家〉を牢獄と意識している。第一部第十二章は、「あかしで荘の鉄格子の門を通ったとき、アドリエンヌは牢獄に帰ってきたような印象をうけた」（三六四頁）という文ではじまっている。

(5) Jacques Petit: 《Notes》 pour *Adrienne Mesurat, Œuvres complètes* de Julien Green, t. I, p.1135.

(6) アントワーヌ・フォンガロの前掲書、四五頁。

(7) Jean-Claude Joye: *Julien Green et le monde de la fatalité*, Arnaud Druck, Berne, 1964, p.95.

(8) Denis de Rougemont: *L'Amour et l'Occident*, coll. 10/18, Union Générale d'Editions, 1962, p.33. なお、ルージュモンのこの書物は、わが国では、鈴木健郎・川村克己氏の翻訳で、『愛について』という邦題のもとに、一九六九年、岩波書店より刊行されたことがあった。

(9) 同右、三三―三四頁。

(10) 同右、四三頁。

(11) Jacques Petit: ≪Notes≫ pour *Adrienne Mesurat*, p.1137.

(12) André Blanchet: ≪Julien Green en proie à l'existence≫, in *La Littérature et le spirituel*, t. II, *La Nuit de feu*, Aubier, 1960, pp.186—187.

(13) *Pamphlet contre les catholiques de France, Œuvres completès* de Julien Green, t. I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972, p.892.